

柳 英 介



三重県神道青年会報 第 38 号

会長挨拶

会長 石上 陽 祥



平素は役員を始め会員の皆様方には社頭奉仕に励まれますと共に

青年会諸行事活動等に格別のご支援、ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

一年が過ぎました。被災された方々には一日も早い復興を祈念申し上げますと共に、お亡くなりになられた方々に心より哀悼の意を表します。

青年会では、昨年より復興支援活動を行ってきましたが、今後長期にわたり復興支援活動を行っていく所存です。

平成二十三年度の会務をお預かりしてより早くも一年が過ぎました。不安と緊張の中での始まりでしたが、皆様方の力によって滞り無く諸行事が遂行出来ましたこと深く感謝申し上げます。これから、青年会の活動に多くの会員の参加を頂き、お互いにかげがえのない交流と絆を一層深め、より活発な活動を展開していきたいと思

平成二十三年七月六、八日には宮城県岩沼市において一般ボランティアセンターに参加し活動を行い、七月二十日には神青協の復興支援活動として福島県、九月二十一日には岩手県へ、十一月八日には宮城県と役員、会員達がボランティアに参加致しました。また、昨年八月二十五日に発生し紀伊半島を中心とした甚大な被害をもたらした台風十二号で被害に遭われた神社へ作業の助勢を行いました。

宮城県岩沼市に行くに当たっては、初めての経験でもあり、なにか手を付けたらよいのか解らず、まず情報収集から始めました。現

地の情報、インターネットでの情報、平成七年に発生した阪神淡路大震災の時に先輩方が行った復興支援活動の記録などあらゆる情報を収集しました。ボランティアを行うには、ボランティア活動保険への加入が必須であり、高速道路も申請すれば災害派遣等従事車両証明書が発行され高速料金が無料になるなどがわかってきました。

車三台で十時間ほどかけ仙台市内に入りました。その時の印象は、人々が普通に日常送っているようにみえ、町は煌びやかで賑やかに人々が行き交い、被災地に来たという実感が湧きませんでした。しかし、翌日岩沼市へ向かうため高速道路を走っていると景色が一変し、車の残骸、流木の束、瓦礫の山、と仙台市内とはまるで違う世界に似たような思いに駆られます。津波の破壊力の凄まじさはテレビで見たときは凄いと感じたが、現地に来て実際の現場を見たとき惨いと感じました。

ボランティア活動は民家の庭、また側溝に溜まった土砂の片付け等でしたが、現地の方と話す機会があり、その方は「海はもう見たくない」と話された時はなんとも



言えない気持ちになりました。

このような人たちが一日も早く穏やかに暮らせるよう祈念しつつ、今後も復興支援活動に取り組み、そして我々自身も防災意識を高め取り組んでいかなければならないと考えます。

最後に、会員諸兄のご支援とご協力をお願い致しますとともに、皆様方のご健勝を心からお祈り申し上げます。今後も青年会を宜しくお願い申し上げます。

副会長挨拶

副会長 菱川 由 貴



副会長を拜命してより、漸く一年が経とうとしておりますが、会長を始め役員・会員の皆様のご協力により、大過無く務めさせて頂いております事に、心より感謝申し上げます。

さて、この一年を振り返りますと、東日本大震災、そして県内では台風十二号の豪雨による水害と、自然の脅威を痛感した一年でありました。

副会長を拜命してより、漸く一年が経とうとしておりますが、会長を始め役員・会員の皆様のご協力により、大過無く務めさせて頂いております事に、心より感謝申し上げます。

さて、この一年を振り返りますと、東日本大震災、そして県内では台風十二号の豪雨による水害と、自然の脅威を痛感した一年でありました。

この未曾有の災害に際し、当会では去る七月七日、宮城県岩沼市に於いて、一般ボランティアとして復興支援活動に参加しました。住宅周辺の泥掻き等、炎天下の過酷な作業でありましたが、被災者として苦しい立場にあるにも関わらず、「暑い中を有り難う」と言って飲み物を差し出され、支援に伺った我々の方が恐縮する場面もあり、自分よりも相手を気遣う日本人の奥床しき、そして人と人との繋がりを感じた次第です。

一方、近年の世情を顧みますと、

経済至上主義のもと、「個」の権利・利益を追求し、家族や地域との繋がりが希薄となり、凡そ想像もつかない凄惨な事件が増加し、国政に目を向けますと、自虐的な歴史観に縛られ、弱腰な外交に終始しています。このままでは、長い歴史によって培われた伝統文化が崩壊してしまうのではないかと、という危機感を抱かずには居られません。

しかし、大災害に直面しながら秩序ある行動を執り、互いを助け合う姿に、世界からは賞賛の声が寄せられ、日本人の心には、道徳心や公共心、家族や地域との絆を大切に、和の精神が息づいていることを感じました。この日本人の精神や伝統文化を、未来に亘って永く伝えて行かなければなりません。

神青の活動の一つ一つは、地道なものかも知れませんが、活動を通じて自己研鑽に努めつつ神職相互の絆を深め、神宮と各地の神社、そして地域社会との繋がりを強くし、我が国の歴史と伝統文化を永く後世に伝え、斯界興隆の為に努めて参りたいと存じますので、皆様方の御支援御協力の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

副会長挨拶

副会長 宮崎 吉 史



先ず以て、謹んで聖寿の万歳と皇室の弥栄をお慶び申し上げます。

神宮に於かれましては御遷宮諸祭恙なく斎行されておりますこと慶賀に存じ上げます。

早いもので二期目の副会長という重責を拜命して一年が経とうとしています。

昨年の活動は平常通りの神青活動は基より災害の復興支援活動に重きを置いての活動であったと言わざるを得ません。

東日本大震災・台風十二号・十五号等々、自然災害の復興支援活動に重きを置き自然災害によって被災した方々への支援活動を神青の重要な活動の一つとして奉仕してきた。復興支援活動を通じて改めて自然の偉大さと驚異、我々人間の生きるといった行為がいかに大変なものであるのか、どれだけの価値があることなのか、真剣に考えざるを得ませんでした。被災

地に足を運びボランティア活動に従事すればするほどその思いは強くなっていききました。今こそ我々神道青年会の絆が試される時だと強く感じております。とは言え昨今では「絆」という言葉が巷で、安易に使われすぎていくように思えてならない。「絆」の意味を辞書で引けば「人と人との断つことのできないつながり。離れがたい結びつき」とあります。今一度この「絆」の意味を再認識し、本来の意味である絆を深めるべく社会貢献に勤めて参る所存です。

神道青年全国協議会創立六十周年記念式典にて高田宮妃殿下が述べられた、「我が国や世界の諸問題、平和について考えられる時、行動も大切ですが、神職としての最も大切なおつとめが「祈り」だ」と言うことを決してお忘れにならないよう」と述べられたように、我々神職の持つ本分が「祈り」である事を片時も忘れずに我々三重県神道青年会の活動に従事し、又その活動の一助になればと思、甚だ力不足であります副会長という重責を勤めさせて頂いたと思、何卒宜しくお願い申し上げます。

副会長挨拶

副会長 宮田 幸尋



先ず以つて、この度の東日本大震災・台風十二号の豪

雨により、被災されました皆様には、衷心からお見舞いを申し上げます。昨年四月に副会長の重責を仰せつかって早一年を迎えました。この間、東日本大震災復興支援や台風十二号による被災神社の復旧活動等、通年の活動に加えさまざまな諸活動に、物心両面の御協力を賜りましたこと厚く御礼申し上げます。

三月十一日の震災直後から、会長共々「青年神職としてできることはなんだろうか」と思索しておりました。阪神淡路大震災の復旧活動を経験された先輩方の体験談を伺い、「被災地へ」との思いが強くなりました。しかし、三重県から東北の被災地に向かうためにはそれだけで多額の費用が必要です。「被災地に向かう旅費を義捐金として送ったほうがいいのではないか」との意見もありました。

役員紹介

- 会長 石上 陽祥 津八幡宮
- 副会長 菱川 由貴 神宮
- 宮崎 吉史 結城神社
- 宮田 幸尋 猪田神社
- 教化・研修委員会 遠藤 嘉章 彌都加伎神社
- 遠藤 玲 八幡神社
- 遠藤 英洋 鴨神社
- 三橋 航 海山道神社
- 馬場 正徳 加富神社
- 千秋 季嗣 神宮
- 吉田 実生 多度大社
- 渉外・福祉委員会 楠 直幹 阿自賀神社
- 冷泉 光一 神館神社
- 小倉 孝之 二見興玉神社
- 山下 真史 小川神社
- 木村 浩二 飯野神社
- 高部 友邦 神宮
- 総務・広報委員会 磯島 一郎 神宮
- 塚本 敏 猿田彦神社
- 福井 健士 猪田神社
- 大野 一省 椿大神社
- 竹内 一将 加世智神社
- 芦原 工記 三重県神社庁
- 監事 原 忠照 八阪神社
- 神田 基 猿田彦神社

定例総会

平成二十二年定例総会が四月十八日(月)、神社庁会議室にて神田会長以下役員・会員二十五名、来賓二名の出席にて開催された。開会儀礼の後、会長挨拶、来賓の石上紀男神社庁長・福井良典三重県氏子青年協議会長より祝辞を頂戴し、その後時田副会長を議長に選出し議事へと移った。まず会長より二十二年度会務報告、事務局より会計決算報告、監事より会計監査報告が行われ、夫々承認された。次に神田会長任期満了に伴う役員改選が行われ、新会長に石上副会長が指名され、新役員を代表して挨拶を行った。(その他監事・役員は上段参照) 引き続き、二十三年度活動方針案並びに事業計画案、同会計予算案が審議されて承認を受け、定例総会は滞りなく終了した。



平成二十二年定例総会が四月十八日(月)、神社庁会議室にて神田会長以下役員・会員二十五名、来賓二名の出席にて開催された。開会儀礼の後、会長挨拶、来賓の石上紀男神社庁長・福井良典三重県氏子青年協議会長より祝辞を頂戴し、その後時田副会長を議長に選出し議事へと移った。まず会長より二十二年度会務報告、事務局より会計決算報告、監事より会計監査報告が行われ、夫々承認された。次に神田会長任期満了に伴う役員改選が行われ、新会長に石上副会長が指名され、新役員を代表して挨拶を行った。(その他監事・役員は上段参照) 引き続き、二十三年度活動方針案並びに事業計画案、同会計予算案が審議されて承認を受け、定例総会は滞りなく終了した。

(宮田幸尋 記)

新職員交流会

七月四日(月)、新職員交流会が県営サンアリーナで開催され、会長以下二十九名(内新職員十四名)が参加し、それぞれ三名一組となり、A・S・Jチームが総当たりで卓球を楽しんだ。

当初は緊張していた新職員も試合が進むにつれ、互いに応援したり、健闘を称え合う姿が見られた。本年度はFチーム(塚本・堀川・大辻)が優勝した。その後、神宮会館にて表彰式・懇親会を開催し、記念撮影のあと新職員同士の自己紹介や意見交換が行われた。

(塚本 敏 記)



第三十二回お宮の子供会

八月二日(火)、三日(水)に津市ご鎮座の結城神社(宮崎吉章宮司)に於いて開催された。初日は雨となったが、会長を始め、役員会員十四名、小学生五名が参加した。正式参拝、開会式を行った後、神社内の様々な施設を散策し、続いて会長の案内により隣接する津八幡宮にお参りをした。夕食後、役員達により「子供のお伊勢参り」と題した演劇が執り行われた。役員達の熱演もあって、子供達も興味を持って喜んで観賞していた。

その後、マル・モリ体操や花火を楽しむ、一日のしめくりに拜殿で参拝を行い就寝した。一日目は、晴天に恵まれ、ラジオ体操、参拝、境内清掃を行った。朝食後、自然体験と言う事で、地元の野菜を採らせて頂いた。普段経験したことのない子供達は楽しそうに野菜を収穫していた。武道場にてインディアカを行い、次に役員と子供で舞錘り式火起こしに挑戦したが、思った以上に中々火が点かず汗だくになりながらも火が点いた時には、火の有難みを皆で実感した。熾した火を使いバーベキューで昼

食を摂った。外で大勢で摂る食事は大変美味しく、子供達もお腹一杯になるまで食べていた。その後「ありがとう」を伝えたい人、手紙で伝えようと子供に手紙を書かせると、思い思いの「ありがとう」を書いていった。閉会式のち、拜殿前で二日間のお礼を込めてお参りし解散した。子供達が神社を身近に感じ、お宮の子供会が、成長していく上で楽しい思い出となり、「ありがとう」と素直に言える人となってほしいと願っている。

(冷泉光一 記)

会務報告

- 〈平成二十三年四月〉
- 二日 神社総代会定例総会助勢 一三名奉仕 神宮会館
- 八日 平成二十二年定例総会 二五名出席 神社庁
- 二七日 第六三回神青協定例総会 二名出席 神社本庁
- 〈五月〉
- 一七日 神青東海地区定例協議会 四名出席 尾張大國霊神社
- 一九日 第一回役員会 一八名出席 神社庁
- 〈六月〉
- 二七日 第二回役員会 一五名出席 神社庁
- 二七日 平成二一・二二年度卒業式 二一名出席 茂波
- 〈七月〉
- 四日 新職員交流会 二九名参加 県営サンアリーナ
- 六日 東日本大震災復興支援活動 一〇名参加 岩沼市内
- 八日 神青東海地区定例協議会 四名出席 神宮司庁
- 二〇日 神青協東日本大震災復興支援活動 四名参加 福島県内
- 二一日 第三回役員会 一五名出席 結城神社
- 〈八月〉
- 二日 お宮の子供会 一七名参加 結城神社
- 三日 神青協夏期セミナー 九名参加 神社本庁
- 三一日

東日本大震災復興支援活動

七月六日(水)から八日(金)会長以下、三重県神道青年会有志十名が宮城県岩沼市に於いて復興支援活動のボランティアに参加した。

初日早朝五時半に津八幡宮に集合、参拝の後、車三台で仙台市に向かい、その日は市内に宿泊した。翌日、午前八時頃、岩沼市ボランティアセンターに到着。この日は神青を含め約四十名の参加があり一組十名に分けられ、説明の後、作業依頼のあった家に向かった。主な作業内容は家の窓ふき、木材の撤去、畑の泥掻き等であり、



作業終了後、依頼主の方から「本当にありがとうございました」と御礼の言葉を頂戴した。

翌日は宮城県神社庁に向かい、お見舞い金をお納めし、職員の方より被害状況や今後の対応等について拝聴し、限られた時間であったが復興支援の初期の目的を果たすことができた。(大野一省 記)

神青協東日本大震災復興支援活動(第一次)

七月二十日(木)、神青協主催により、いわき市久之浜で鎮座の諏訪神社(高木美郎宮司) 氏子区域にて活動が実施され、全国から約百名が参加。当会からは、四名が参加した。

活動区域は、海岸部の住宅が密集している地域で、主要道路から一步入ると路地が入り組んでいる場所である。大型の重機もなかなか入れず、当時は復興作業も難航しているようであった。津波は海岸から高台になる一キロメートル程の住宅地まで押し寄せた。辛うじて残っている家屋を見ると、二階中程に泥の線が残っており、津波の脅威が一目瞭然。広がる風景



は誰もが言葉が失う有様であった。

そこでの活動は、浸水した家屋を取り壊す為、屋内にある瓦礫等を手作業で外へ出し、それを回収場所まで運ぶという内容である。家電や箆筒、食器棚などに残された家具、食器には海底の泥が被り異様な匂いが立ち込めていた。可燃、不燃物など仕分けながらの作業で、用意の大きな業務用ゴミ袋も直ぐに溢れ、回収場所までは一袋を八人がかりで何度も往復した。短い時間ということもあり一班四、五十人で一軒が精一杯であった。活動に参加し、思うことは、我々青年神職としてこれからのどうするかである。月日が経ち、記憶が

風化し、意識が薄らいではいけない。被災地の方々が少しでも早く元の生活に近づけるよう、今後も復興に向け活動を続けていくべきである。各会員には、少しでも多くの活動実施と参加をして頂きたい。(稲熊雅彦 記)

神青協東日本大震災復興支援活動(第二次)

九月二十一日(水)、神青協主催の大震災復興支援活動に会員の四名が参加した。

前日夕刻に花巻市に集合し結団式を行い、翌朝バスで活動地の釜石市へと移動した。

当日は台風十五号が東北地方に接近しつつあり、雨天下であったため、支援活動は屋内作業とされ、支援物資の仕分け作業に従事することとなった。

「復興支援」と聞くと、どうしても瓦礫除去作業などがまず頭に浮かぶところではあったが、支援物資の仕分け作業も実際に行ってみると非常に人手と労力を要するものであり、被災地の復興支援の為には様々な側面に於いての協力が強く求められていると、認識を

新たにする次第であった。

作業終了後、釜石市内の被災各地を視察した。被災状況を初めて目の当たりにし言葉が失う参加者も多く、改めて被害の甚大さを痛感したことで、一同は一日も早い復興を願わずにはいられなかった。

(内山 陽 記)

神青協東日本大震災復興支援活動(第三次)

十一月七日(月)、宮城県で開催され、百七名の参加者が集まった。幾つかの班に分かれ瓦礫撤去や神社清掃奉仕等が行なわれた。当会からは会長以下会員五名が参



加し、宮城県出身の神青協佐藤副会長をはじめ十四名の班で活動を行った。

活動は宮城県七ヶ浜町ご鎮座鼻節神社(本郷敦子宮司)にて、凡そ九時から十四時まで清掃奉仕。続いて被災地の視察し、社務所が流され鳥居が倒れた神社や、一面に積まれた瓦礫、消失した住宅地跡が津波の恐ろしさを物語っていた。

宮城県全体から見れば津波の被害は一部であり、多くの地域は震災以前と変わらぬ生活にまで回復しているようだが、沿岸部をはじめ完全な復興はまだ遠く、今後とも被災地への中長期的な支援が必要と感じた。

(神田直久 記)

台風十二号 大馬神社災害復旧支援活動

九月十六日(金)、十七日(土)、会長始め四名で、熊野市ご鎮座の大馬神社(片岡昭雄宮司)において、台風十二号による災害の復旧支援活動を行った。まず、十六日は、拜殿の土間や授与所を清掃した。

翌十七日は、奥宮の境内に、本

殿前に溜まった土砂を一輪車にて繰り返し運び出し、流出した白石も洗い清めて、元の場所に振り分けた。

(小倉孝之 記)



神青協 物故者慰霊祭

三月十日(土)午前十一時より岩手県釜石市根浜海岸にて斎行、当会より会長以下二名参列。当日はみぞれ交じりの小雨が降る中、海岸の特設会場にて南坊城光興(神道青年全国協議会副会長) 齋主以下全国各地の神青協会員十二



名が祭員として、伶人には東北六県神道青年協議会六名がご奉仕された。

参列者は全国より約六十名の青年神職と、地元で被災された方々約四十名。祭典は肅々と、祭典中に大祓詞を参列者全員で三巻奏上しつつ厳粛に斎行された。

祭典終了後、大野清徳神青協会長からの挨拶、来賓として岩手県神社庁長・西館勲様より御礼の挨拶を賜った。

一日も早い復興復旧をお祈り申し上げると共に自分達が今出来る事を今一度考えて取り組まなければいけないと強く感じた。

(宮崎吉史 記)

第十回 ブロック研修会

北部ブロック

十一月十六日(水) 多度大社に於いて開催され十一名が参加した。研修会にて木村有先生(桑名市防災課課長)から、ボランティアに加え、様々な災害時にどういった被害が考えられるのか、またそれを受け、我々は何のように対処し、備えなければならぬかなど、特に桑名市における具体例を絞り、ご講義を頂いた。

質疑応答では、神社における対応や神社で考えられる被害など、今後の社頭での奉仕に活かそうという質問が多かった。



講義のまとめとして「生きるために備えよう」「生きるために避難しよう」という先生の言葉が印象的であった。

今後、東南海地震など大きな災害が想定される中で、神職としての災害対応について、一層意識を高めていかねばならないと感じた。

(吉田実生 記)

中部ブロック

二月十三日(月)、神社庁神殿に於いて馬場明德祭式講師をお招きし、会長以下八名の参加を得て祭式研修会を開催した。

まず開会(行事)を執り行った後、研修に入る。前半は、基礎作法をみっちり学んだ。分かっているつもりであっても日々の神明奉仕の中でつい自分流の作法が身についてしまっており、咄嗟に「進行の〇回転」などと言われて躊躇したりもしたが、神職として基本中の基本である祭式作法を見直す事が出来た。

後半は衣紋の講義と質疑応答の時間である。一社の故実是最優先であるが県内でも地域によって色々な作法があるという事など興味深い事が出来た。



いお話を伺うことが出来た。(福井健士 記)

神宮・南部ブロック

十二月八日(木)、会長始め会員二十一名が参加のもと、猿田彦神社二階講堂に於いて岸川政之氏(多気町まちの宝創造特命監)を講師にお迎えし開催された。先生は高校生レストラン「まごの店」等、コミュニティビジネスの手法を取り入れた地域おこしに取り組まれている方で、主に地域活性化について御自身の経験談を多く交えての講演となった。

「まごの店」でも当てはまるが事業を行う場合、携わる全員が一つの目標(バイタリティー)を持って、ひたむきに取り組む事の必要

性を説かれた。また、その姿勢は周囲に波及し、自然と進むべき道の手助けとなることであった。神職も多くの方々の御蔭を蒙る立場であり、中執持として神明奉仕するいち人間である。このことを再確認する御縁を戴けた研修会であった。

(北川峻佑 記)

神宮神道青年会との合同研修会

九月二十一日(水)、神宮司庁第一会議室にて開催され、三重県神青は会長始め十五名、神宮神青は佐藤会長始め二十七名が参加した。講師には、神宮技師山口剛先生をお招きして「神宮の御領地について」の演題で、神宮の神田や御園で作られる神饌について、拝聴した。

神宮の神饌は、天候に関わらず、常に最高の状態でお供えされるので、日頃より管理や育成に、並々ならぬ努力を注がれていることを知った。

講演後、場所をすし久に移動し、山口講師を囲んで、懇親会が開催された。当初は、お互い固さが見られたが、杯を交わすに連れて、如々にうち解け、有意義かつ濃厚な時間となった。

(磯島一郎 記)

建国記念の日啓発活動

北部ブロック

二月九日(木) 会長以下会員九名参加のもと執り行われた。

当日、午後二時に四日市赤堀の八阪神社に集合し、社務所をお借りし白衣・袴に着替え準備を整え、近鉄四日市駅に移動した。午後三時半より四日市駅内のふれあいモールに於いて、啓發文に花の種を添えた物を千個用意し、配布した。参加者皆で「建国記念の日には国旗を掲げてお祝いしましょう」と声を掛け啓発活動が進められた。理解のある方や断られる方様々な方々がおられたが、約一時間で無事配り終え啓発活動を終了した。

(冷泉光一 記)



中部ブロック

二月八日(水)、会長以下八名参加のもと、津駅前にて行った。

当日は午後三時に三重県護国神社に集合後、準備を整え三時半より活動開始。趣意書を付けた花の種約六百を会員が手分けして学校帰りの生徒を中心に道行く人々に手渡した。前年よりも快く受け取って頂ける方が増え、当日は小雪のちらつく寒い日であったが約一時間の間に配り終えることができた。

今の若い世代は以前よりは多少は是正されて来たが、偏った教育を受けた人が多い中、私達のこの活動を通して微力なりとも日本国を大切に思う心を持つ方が増えていけば幸いである。(福井健士 記)



神宮・南部ブロック

二月八日(水)、午後一時、宇治橋前にて会員七名参加のもと行われた。例年と同様に建国記念の日啓発の趣意書に花の種を添えて参拝者に二千配布した。

趣意書には、建国の意義についての重要性、つまり、国は存在して当たり前ではなく、世界を見渡すと悠久の歴史をもつ日本はいかに恵まれた国であるか。皇室あつての我が国である事を今一度考えて頂けるような内容を記した。

愛国の芽だけではなく、確とした根が張ることを願いながら…。

(潮 貴文 記)



氏子青年協議会との合同研修会

二月二十五日(土)、四日市市大宮町ご鎮座の志氏神社(富永主税宮司)にて開催された。氏子青年協議会からは藤森会長はじめ三十名、神道青年会からは、会長はじめ五名、加えて最近氏子青年会を立ち上げられた楠郷総社神明社の二名が同席し、総勢三十七名が参加した。

まず正式参拝の後に開会式。引き続き富永宮司より「郷土の歴史を知る」というテーマでお話を頂いた。志氏神社境内には古墳があることから、古墳時代に遡って郷土史についての話を拝聴した。その後実際に境内にある古墳の周辺を巡りながら富永宮司より詳しくご案内頂いた。

次に四日市港ポルトビルに場所を移しナビゲーションシアターを見学。四日市港が中部東海圏において海運の重要な拠点であることを再確認した。最後に懇親会が開かれ、両会員が交流を深めた。

来る第六十二回式年遷宮に向けて両会の相互の連携協力が必要であり、その意味でも意義深い会となった。

(塚本 敏 記)

神青協『巫女のための 神宮研修会』助成奉仕

二月二十三日(木)、二十四日(金)、神青協主催の本研修会に、三重県のスタッフとして参加した。

この研修会は、全国各神社で奉仕している巫女を対象に昨年度より始まったもので、神宮に関する見識と、巫女としての素養を深め、延いては日本国民として精神の昂揚に資することを目的としている。今回は、全国より約七十名が参加し、参加者それぞれが感慨深げに日程を進めていく姿が印象的だった。懇談会では、日々の奉仕などについて互いに語り合うなど、普段顔を合わすことが珍しい全国の同志との会話を楽しんでいるようだった。

今回は、主催者の立場での参加ではあったが、我々にも有意義な研修会であった。

(吉田真子 記)



平成二十三年度 県外研修

九月二十七日(火)・二十八日(水)、福岡県にて県外研修が行われ、会長以下六名が参加した。

一日目は榊田神社にて正式参拝を行い、境内に隣接する博多歴史館を訪れ博多祇園山笠の歴史や伝統について、資料や説明に基づき学ばせて頂いた。

二日目は福岡県護國神社、宮崎宮を参拝し、太宰府天満宮にて正式参拝を行った。境内や隣接する九州国立博物館まで御案内頂き、説明を受けた。平日にも関わらず多くの参拝者が訪れ、その賑わいや活気を直に感じ取ることができた。今回の研修を通じて、福岡県の活気は青年活動を始め今の日本人に最も必要なものであると実感した二日間であった。

(山下真史 記)



神青協中央研修会

三月二十二日(木)・二十三日(金)の両日、福井市のホテルフジタ福井に於いて、北陸神道青年会主管の下、開催された。当日は全国より約三百五十名の青年神職が一同に集い、当会から会長を始め十三名の会員が参加し、「立志」一人ひとりが、今、なすべきことの道標として」と題して三部構成にて行われた。

今研修会を通して共通することは、先ず現在の日本・自分の在り方をしっかりと把握すること、そして国家・国民が共に正道を歩めるよう一人一人が研鑽を積み、教化すべきということである。更に輝く未来に向けて中執持である神職は大きな責務を担っていると改めて考えさせられた。

(北川峻佑 記)



編集後記

あの震災から早くも一年が経つ。震災に始まり、台風、洪水と今年には史上稀に見る自然災害の年であった。今なお多くの方が避難所生活を余儀なくされ、その爪痕は非常に大きいです。実際に自然の驚異を目の当たりにし、愕然とされた方も多いと思われる。

そのような中、二次災害の危険を顧みず、多くの会員がボランティアに参加して、実際に現地に足を運んだ意義は非常に大きい。また、今回、ボランティアに参加できたことは、不在の間、社務を支えていただいた方のお陰である。大変な災害の年ではあるが、日本中が一体となった年でもあった。

災害は、多くを奪ったが、「日本人の絆の力」、「結束の強さ」を、改めて思い起こさせたのではない。日本人の絆は昨日今日のものではない。大いなる神々のもと、我々日本人の祖先から、何千年来と受け継がれてきた財産である。失ったものは大きい、我々が日本人であることに変わりはない。日本人同士、絆を信じ、共に歩んで行きたい。「頑張ろう、日本」

(磯島)

会報「榊 葉」

第38号

平成24年 3月31日
発行者 石上陽祥
編集 総務広報委員会
発行所 伊賀市下郡591
猪田神社内
三重県神道青年会